更級日記難義考

宮田和一郎

古典文学には、どんな小さな作品にも、かならず難解な箇所、不明な語句、わかりさうでしかもはつきりしない、といふやうな箇所が多なり少なり、ないものはない。概していへば、制作の当初から、継続的に多くの読者をもつて居つた作品は、比較的にわかりやすいといふことがいへるとおもふ。物語の類は、一般にわかりやすい。随筆の類はややむづかしい。日記の類になると、全体的に、きはめて難解である。爪も歯も立ちさうもないものさへある。一口に物語といつても、あまり人気のなかつたものは、やはりむづかしい。宇津保物語など、私にはわからない。狭衣でも寝覚でも、とりかへばやでも、住吉でも、どれもこれも私には難物である。枕草子も難解だが、日記の類になると、はじめから読む気がしない。和泉式部でもさうだが、蜻蛉日記などは、名を聞くさへもへきえきする。土佐日記でも、さう容易なものではない。

なかでも、更級日記は、わりあひにわかりやすい作品だとおもふ。この点、定家卿に感謝しなければならない。卿の時でさへわからないところがあるといつてゐるのであるから、本当にわからないところは、永久にわからないのであらう。しかし、われわれの研究不足のためにわからないのならば、努力しなければならない。

開巻第一に、「いまたちといふところに移る」とある、その「いまたち」を、新館の意でもあらうとする説がある。「いまたち」といふ詞は、どうも聞いたことのない詞だ。また新築の住宅を「いまたち」といつたとも聞かない。それに前国司が門出する折に、いちいち新館を作つたといふ例も知らない。それからまた「いまたちといふところ」といふ書きぶりからみると、どうしても「住宅」といふ意味がうかんで来ない。何といつても、ここは場所の意味、地名にとらなくてはならないやうに私にはおもはれる。それでこの日記のなかから、「といふところ」といふ用例をしらべてみた。

もろこしが原といふところも
岩壺といふところあり。
沼尻といふところもすがすがとすぎて
宮路の山といふところ越ゆるほど
野上といふところにつきぬ。
やひろうちといふところにとどまりて
山の辺といふところの寺にとどまりて

高浜といふところにとどまりたる夜

かうならべてみると、この日記の叙述では「といふところ」の「ところ」は、いづれも場所であり、地名をさすのである。さうしてみると、「いまたち」も、地名とみるのが最も穏当であり、無難ではなからうか。なほ、

竹芝といふさかなり。

大井川といふわたりあり。

天中といふ川のつらに

ゐるのはなといふ坂の

なで島竹生島などいふところの見えたる

大津といふ浦に

なども、あはせ考へるべき有力な資料であらう。

次は、「うちなやみて臥したる月影さやうの人にはこよなくすぎて」の「月影」である。ここは次のやうに解されてゐる。

(一) なやみやつれて寝ているのであるが、屋根から漏れて来る月の光は、そうした人には又格別一杯に照らして

(二) 産後のつかれで（まざまざと）なやみ伏している、月の光はこのなやましげに伏している人に、この上もなくすき通り

(三) 月の光がさように悩ましげに臥している乳母の姿の上に、この上もなく美しさを増してもれ入り

(四) やつれてねている乳母が月の光を一ぱいにうけていた姿は乳母などとは思われないほど清らかに見えた。

(五) おもやつれして寝ているうばの姿が、月の光にてらされているさまは、こうしたうば程度の人としては

(六) 月光に照らされている乳母の姿。

これらを見ると、「月影」を月の光と解する見方と、月にてらされた姿と見る説と、二つにわかれてゐるのである。もともと月影にはそのどちらの意味もあるが、ここでは、そのどちらでもよいのではない。結論からいふと、ここの「月影」は、「月下の姿」「月光にてらされた乳母の姿」と解さなくてはならない。月下の姿を月影といつた例は源氏にもある。

思ひあはする折折の月影（末摘花の姿）などを、いとほしきものから、をかしう思ひなりぬ。（末摘花）

女君（紫上）泣きしづみ給へる、ためらひてゐざりいで給へる月影、いみじうをかしげにてゐ給へり。（須磨）

ほのかなりし月影（大君中君の姿）の見劣りせずば、まほならむはや。（橋姫）

なほこれに関連して、「火影」「夕ばえ」なども思ひあはすべきである。帚木の巻に、源氏の美しさを叙して、「添ひ臥し給へる御火影いとどめでたく」とあるのは、燈火にてらされた源氏の姿である。また夕顔の巻に、源氏が夕顔と河原院にとまつた条に、「夕ばえを見かはして」とあるのは、二人の夕ばえの姿を互に見あふのである。

足柄山といふは、四五日かねて、おそろしげに暗がりわたれり。

この「四五日かねて」が問題である。諸註解書を見ると、次のやうに解してゐる。

(一) そこを越える四五日が間、老樹が生いしげっていて

(二) 四五日間の行程にわたって（又は四五里にわたって）両方の山が高く、樹木がよく茂っていて

(三) （これを越えて行く）四五日にわたって、ずっと（大木がおいしげっていて）

(四) 四五日かけて如何にも恐ろしいように一体にまっくらい

(五) 四五里にわたって恐ろしいまでに樹が茂って

(六) 足柄山という処は、四五日かかって越えて来たが

定家卿本には、はつきり「四五日」とかいてある。であるから、一応それにもとづいて解釈しなければならない。「暗がりわたれり」は、樹木が茂つてゐるためであることに論はない。「四五日」を、足柄山を越える所要日数と見てゐる説が大多数であるが、事実そんなに遠距離ではない。そんな難所でもなかつたらしい。作者は早朝に麓を出かけて、夕方は、越え終つて横走の関の附近に泊つたとかいてある。諸説は納得ができない。ところで、どうかと聞かれたら、結局私もわからない。そこで、「四五日」の日は里のあやまりではないか、とも考へてみたくなるのである。

来年なるべき国どもを、除目のことみな書きて

この「除目のこと」を「除目のごと」と濁つて解してゐる説が多い。

(一) 任官目録のようにすっかり書いてあって

(二) 任官状のように皆書いて

(三) 除目のようにすっかり書いて

(四) まるで朝廷の任官目録のように

(五) 朝廷の任官目録のごとく

(六) 官に任ずる者の官姓名が目録のように書かれてあり

諸説はいづれも、「除目」を文書・目録の類と見てゐるのであるが、さういふ用例があるのであらうか。除目は任官の儀式である、行事である。文書ではない。それでは次に、「ごと」と濁つてよんでよいだらうか。この日記では、語法的にみると、

とどめおきてわがごと物や思ひけむ

わがごとぞ水の浮寝にあかしつつ

と、和歌の中にだけ、「わがごと」として二つの用例が見えるが、地の文にはない。地の文では、「この家を内裡のごとく作りて」と、「ごとく」を用ひてゐる。この日記には、その用例がとぼしいために、絶対的の確言は期しがたいが、「除目のこと」と清んでよむのが、妥当性が多いとおもふ。そして「除目に関することを委細に註して」と解すべきであらうとおもふのである。なほ、用例は同一作品内にもとめるのが原則であるが、この場合、よぎなく源氏をふりかへつてみることとする。源氏では、

たたうめの花のごと

雲居の雁もわがごとや

笛竹に吹きよる風のごとならば

と、和歌や歌謡に用例があるほか、地の文にも、「あのごと」「仰せのごと」「おなじごと」「思ひのごと」「思ふごと」「かくのごと」「かたのごと」「つねのごと」「手に捧げたるごと」「本意のごと」「例のごと」の用例がみられる。通覧するに、大方慣用によつて語法が固定し、任意随所に用ひられたものでなく、以上列挙の範囲を出ないやうである。「おなじごと」の使用が最も多くて十五例、他は四例、二例、一例である。単に参考にとどめること

を繰返してことわつておきたい。

なほ頼め梅の立枝は契りおかぬ思ひのほかの人もとぶなり

この歌は、兼盛の歌によつてゐることに論はないが、その解釈をみると、

㈠　やはり私を頼みにして待っていて下さい。梅の立枝を見ては、思いがけない人までもたずねて来るものですから。

㈡　やはり頼みにして待っておいでなさい、梅の立枝を見るとかねて約束もしておかぬ思いがけぬ人さえ訪ねて来るものでありますから。

㈢　やはり、頼みにして待っていらっしゃい。梅の立枝をば、約束もしない意外の方までも、尋ねていらっしゃるものだという事ですから。

以上の解は、ただこの歌を逐語訳したといふだけのことで、何といふ意味に解してゐるのか、わからない。

この上なお、あてにして待っていらっしゃい。その梅の高くのびた枝は思いがけぬ人をさそうものであるから、私ではなく、かねて約束しておらぬ思いがけぬ人（実母）が訪うことであるよ。

この解で、「思ひのほかの人」を実母と解してゐるのはいかがであらう。

㈠　やはりあてにして待っておいでなさい。梅の立枝を見てはかねて来ると約束をしておかない思いがけぬ人さえ訪ねてくるものでありますから。（まして約束をした私は、きっとそのうちに参りますよ）

㈡　梅の高い枝を見ては、思い掛けぬ人でも訪ねて来ますもの、私だってその中には必ず参りますから失望せずに待っていらっしゃい。

この二つの解釈は、よくわかるとおもふ。

走る走るわづかに見つつ

この「走る走る」が問題である。これを、

㈠　これ迄飛び〳〵に大急ぎで少しずつ見い〳〵して

㈡　（これまで）とびとびにほんの少し見るだけで

㈢　飛び飛びに僅かに見て

㈣　今まではあちらこちら飛び飛びに、わずかに見て

と、「飛び飛び」と解するのはいかがであらう。また次のやうな説もある。

㈠　私は胸をわくわくさせながら（又は、とびとびに）

㈡　今まで胸をわくわくさせながら少しばかり読んで

この二説には、なほ註記して、「胸がどきどきすること。興奮の情をあらわす言葉」「胸をわくわくさせながら」といつたり、古今集の「胸はしり火」を引いたりしてゐる。「走る走る」は、他に適当な用例がないので、結局自分のあたまで解釈するよりみちはないであらう。用例による解釈は、前にもいつたやうに、同一の作品中から、同じ形の語句を引用するのが原則である。同一作品内であつても、語形がすこしでもちがつて居つては、細心に警戒しなくてはならない。まして歌語文語の区別も考へない引例からは、絶対に正当な結論は出て来るものでないとおもふ。ではどうか。私は、「大急ぎで、ほんの一部分づつ読み読みして」と解

きたい。五十四帖そろつた源氏を持つてゐる人は、作者の知人にはなかつたのであるから、あちらから二三帖を、こちらから五六帖を、といつたふうに、次第もなく、一部分づつ借りて来て、しかも読みたがつてゐる人たちが大勢あとに待つてゐるのであるから、ゆつくり借りてゐることはできなかつたのであるから。

思ふこと心にかなふ身なりせば秋のわかれを深く知らまし

この歌の「秋のわかれ」の意味を、はつきりしておきたい。例によつて諸註をみるに、

㈠ この秋の別れの悲しさをしみじみ味わい得たことであろうに。

㈡ この秋のお別れの気持もしみじみと深く味い知ろうものをなあ。

㈢ （遠い旅などには出なくて、京にいて）秋の別れをしみじみと味わっただろうのに。

㈣ この秋の離別を、むしろしみじみと味はったことであらうに。

これらの中には、ややぼかされた解釈もあるやうだが、秋がすぎゆく意味に解してゐるらしい。これに対して、

㈠ この秋のそなたとの別れの悲しさを

㈡ 秋の季節における離別は一段と身にしみて深い。

㈢ 秋に人と別れる悲しみを。過ぎゆく秋と別れることではない。

といふ見方がある。

「秋の別れ」は、語法的にみると、おそらく歌語であろう。諸集をみるに、

もろともになきてとどめよ蟋蟀秋の別れは惜しくやはあらぬ　古今羈旅

なき弱るまがきの虫もとめがたき秋の別れや悲しかるらむ　千載離別

世に知らぬ秋の別れにうちそへて人やりならず物ぞ悲しき　同　恋五

おきあかす秋の別れの袖のつゆ霜こそむすべ冬や来ぬらむ　新古今冬

形見とて残るなみだの幾かへり秋の別れにしぐれ来ぬらむ　続後撰雑上

そらもなほ秋のわかれや惜しむらむ涙に似たる夜半の村雨　続古今秋下

藤衣袖はほすべきひまもなしなみだしぐるる秋のわかれに　同　哀傷

思ひやる方こそなけれめぐりあはむ命も知らぬ秋の別れは　続拾遺雑秋

今もなほしぐるる袖はほしやらず見し夜の夢の秋の別れに　同　雑下

紅葉ばもけふを限りとしぐるなり秋の別れのころも手の森　新後撰秋下

つらかりし秋の別れにつれなくも枯れなで菊の何残るらむ　同　冬

霜となる秋のわかれの露のまにやがて枯れゆく庭のゆふ草　同

山里の秋のわかれのかなしきは鹿さへ声も惜しまざりけり
玉葉雑四
あす知らぬ身をば思はでめぐり来む秋の別れを何惜しむらむ
続千載秋下
とまらじな雲のはたてに棄ふとも天つ空なる秋のわかれは
続後拾遺秋下
越路には時しもあれとしたふらむ雲居の雁の秋のわかれを
新千載秋下
暮れてゆく秋の別れの道芝にこよひばかりの露やおくらむ
同
かねて知る秋の別れを今さらにけふも暮れぬと何恨むらむ
同
慕ひこし秋の別れのなみだより袖もほしあへぬ初時雨かな
新拾遺冬
暮れて行く秋のわかれの道ぞとや野原の草も色かはるらむ
新続古今雑上
秋の別れあはれ悲しき垣根かな音せしをぎも霜にうづみぬ
拾玉集六
帰るさに飽かぬばかりをなさけにて秋の別れを思はざりせば
同
とはれても常世はなれし雁がねの秋の別れは悲しかりけり
拾遺愚草下
風よりは手向に散らせ紅葉ばも秋の別れは君にやはあらぬ
中務集
おほかたの秋の別れも悲しきに鳴くねな添へそ野べの松虫
源氏賢木

うるさいほど用例をあげたが、これらを見わたすに、「秋の別れ」は、秋が別れを告げてすぎゆくことを人が惜しむ意味の慣用語であるとおもふ。秋の季節に人と別れる場合にまれにこの語を用ひた例もあるが、それは、時たまたまその別れが秋であつたことから、秋との別れを惜しむ情にあはせて詠じたものであつて、原義はどこまでも秋が別れを告げることである。

なほ「秋の別れ路」といふ語もある。前者と大方おなじ意味の歌語である。

あすよりは名残を何にかこたましあひも思はぬ秋の別れ路
新勅撰秋下
しばしだになほ立ちかへれ真葛原うらがれてゆく秋の別れ路
続後撰秋下
とどめおく霜の形見は袖ぬれてゆくかた知らぬ秋のわかれ路
続拾遺秋下
移りゆく日数ぞつらき惜しむにもいふにもよらぬ秋の別れ路
続後拾遺秋下
山を越え水をわたりてしたふとも知らばぞけふの秋の別れ路
風雅秋下
名残をば夕べの空にとどめおきてあすとだになき秋の別れ路
新後拾遺秋下
さすがなほ色は木の葉にのこりけり形見もかなし秋の別れ路
増鏡つげの小櫛

これらからみると、あの歌も、原義のままに解するのが正しいとおもふ。

なほこの説をたしかめるうへの有力な資料として「春の別れ」がある。これも語法的には歌語であるとおもふ。

身の憂さも花見しほどは忘られき春の別れを歎くのみかは　千載春下

あかでゆく春の別れにいにしへの人やう月といひ始めけむ　同　夏

待てといふにとまらぬ物と知りながら強ひてぞ惜しき春の別れは　新古今春下

けふのみと惜しむ心もつきはてぬ夕ぐれかぎる春の別れに　新勅撰春下

けふはまづいつしか来鳴け郭公春の別れもわするばかりに　同　夏

見ても憂し春の別れのちかければやよひの月の有明のそら　続後撰春下

後にまたあひ見む事も頼まれず身もおいらくの春の別れは　同　雑上

山のみな移りて今日にあふ事は春の別れをとふとなるべし　同　雑下

伊勢物語

大方の春の別れのほかにまたわが世つきぬる今日のくれ哉　増鏡春の別

なほ「春の別路」といふ語もある。

たがためにこし雁がねと聞かねども帰るはつらき春の別路　続後撰春中

これらによつて、かの「秋の別れ」の意味がいよいよはつきりするとおもふ。

更級日記も、いちいちしらべてゆけば、難解の箇所がつぎつぎと出てくる。次の機会を期するのであるが、最後に一つだけ附け加へておきたい。平安文学研究第十五輯に、三木孝氏は、更級日記の、「日ぐらし、ててのおいおとろへて、われをことしもたのもしからむかげのやうに、思ひたのみ」の「ことしも」について前人のすべての註を非として、蜻蛉日記の「ことしも心地よげならむやうに朝寝になりにけり」と、源氏紅葉賀の「事しもこそあれ、うたての心ばへや」とを引合にだして、「事もあろうに」の意である事は確かであろう、といはれた。この「事もあろうに」の意味であそこを解釈すると、老齢の父が、一切万事をまかせきつて、唯一の頼みとして生きてゐるむすめを、頼もしからむ蔭のやうに思ひ頼んでゐるのに、むすめの方では、それを思ひもよらぬこと、とんでもないこと、非常識なこと、けしからんこと、ふらちなこと、と父を軽べつして居つたことになるのではなからうか。さういふ意味ではないと氏がいはれるならば、もつと適当な言葉を選ぶべきだとおもふ。また氏は、「ことしも」と「事しもこそあれ」とは同じ意味だと考へてゐられるらしいのであるが、さういふ態度でゆくと、「花が咲いた」と「花が散つた」とは同じ意味だ、といつてもよいことになるのではなからうか。だい一「花が」といふところが共通だから。それに散つてもまた咲くのだから、といふことになるであらう。また氏は、「用例を集めて見さえすれば当然わかるはずであるが」といつて、前人のすべてが甚だ怠慢であつたやうに、甚だ不明であつたやうに、そして、解釈などは、事もなげにいつてゐられる。それでわかるならば、ほんとに嬉しい。そして、もうとくの昔に、いはゆる訓詁註釈などといふことに一生を犠牲にしてゐる人はなかつたであらう。

——池坊学園短期大学教授——